

# 宮城県図書館蔵伊達文庫『組題<sup>飛鳥井家</sup>』『組題<sup>冷泉家</sup>』の翻刻と解説

松 本 麻 子

はじめに

宮城県図書館蔵伊達文庫に『組題<sup>飛鳥井家</sup>』（伊 911.2032）『組題<sup>冷泉家</sup>』（伊 911.2033）がある。この二書は歌題を集めた本であり、本の形態も瓜二つ、書写者も同じと判断できるものである（図①参照）。他にも伊達文庫には『組題』（伊 911.201.58 / 911.201.69）という十冊からなる大部な書も二種類あるが、それぞれの内容は同じではない。宮内庁書陵部に『冷泉家組題』と称する本が存在するが、内容は『組題<sup>冷泉家</sup>』とは異なる（後述）。このように幾つかの『組題』と題する写本（青山会文庫のように『十首題』とするものもある）が存在するが、本稿で紹介する『組題<sup>飛鳥井家</sup>』『組題<sup>冷泉家</sup>』のように、書写年代が奥書に記されている本は稀である。『組題<sup>飛鳥井家</sup>』『組題<sup>冷泉家</sup>』は奥書によると両書とも「天和三年（一六八三）」とあり、このことから近世初期の歌壇で用いられた歌題について知ることができる資料と言える。

『組題<sup>飛鳥井家</sup>』は奥書に飛鳥井雅豊の名がある。雅豊は飛鳥井雅章の四男で、寛文四年（一六六四）生、正徳二年（一七一一）没。天和三

年は、雅豊はまだ二〇歳である。『組題<sup>冷泉家</sup>』の方は、奥書に冷泉為綱の名が見える。為綱は冷泉為清の嫡男。寛文四年（一六六四）生、享保七年（一七二二）没。幼い頃父を失ったため、中院通茂の指導を受け冷泉家を建て直した人物である。飛鳥井雅豊と同年生であるから、為綱も二〇歳で『組題』をまとめたことになる。二つの資料は孤本であるため、果たして若い二人が天和三年に、競うようにそれぞれの家の『組題』をまとめた、と考えてよいか慎重にならざるを得ない。しかし、近世初期の飛鳥井・冷泉両家の『組題』の差がこれほど明確にわかる資料は珍しい。そこで本稿では、『組題<sup>飛鳥井家</sup>』『組題<sup>冷泉家</sup>』を翻刻し、両家の歌題について簡単な考察を加えることにする。翻刻に際し、一部の旧字は新字に改めた。また、改行を「/」で示した。

## 【書誌】

『組題<sup>飛鳥井家</sup>』 宮城県図書館伊達文庫。番号、伊九一・二〇三・二。写本一冊。外題、題簽に「組題<sup>飛鳥井家</sup>」、内題ナシ。題簽は左肩に金泥雲霞引。表紙、浅縹色金泥雲霞と水辺草花模様。本文料紙、鳥の子。寸法、縦二三・九糎×横一七・七糎。本文、墨付一九丁、一面七行書。

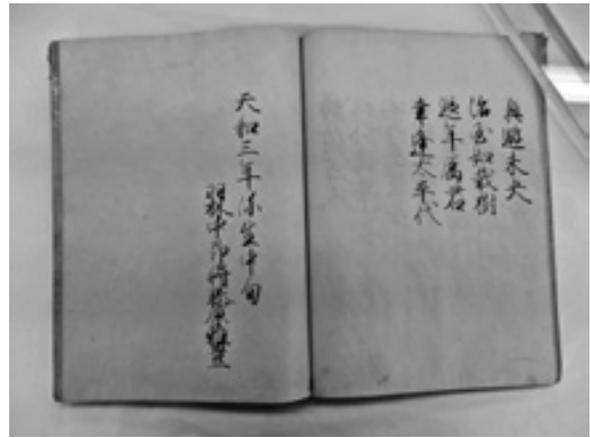


図 1

遊紙、前後ともに一丁ずつ。「伊達伯観瀾閣図書」の朱印。奥書、「天和三年弥生中旬／羽林中郎将藤原雅豊」。

【翻刻】①『組題冷泉家』

(一才) 十首

『組題冷泉家』 宮城県図書館伊達文庫。番号、伊九一・二〇三・三。写本一冊。外題、題簽に「組題冷泉」、内題ナシ。題簽は左肩に金泥雲霞引。表紙、浅縹色金泥雲霞と水辺草花模様。本文料紙、鳥の子。寸法、縦二三・九糎×横二七・七糎。本文、墨付二〇丁、一面七行書。遊紙、前は一丁、後ろは一丁。「伊達伯観瀾閣図書」の朱印。奥書、「天和三年九月中旬／羽林中郎将藤原為綱」。

立春 海辺霞 竹鷺／初郭公 乞巧奠 籬萩／翫月 残菊 旅泊夢／  
社頭松／山霞 款冬 叢螢／初鴈 擣衣 冬月  
(1ウ) 待恋 別恋 晚鐘／神祇  
十五首  
連峯霞 花久盛 暮春鷺／夜郭公 夕納涼 初秋衣／鹿声遥 海辺月  
落葉深／遠村雪 忍待恋 恨別恋

(2才) 山家夢 巖上苔 寄松祝 / 霞春衣 山花如錦 名所藤 / 雲間

郭公 池上蓮 荻似人來 / 月前鐘 暮秋霜 寒樹交松 / 薄暮雪 思不

言恋 逢増恋 / 深更帰恋 海眺望 寄道祝世

二十首

(2ウ) 朝霞 静見花 池藤 / 郭公類 納涼 萩風 / 月出山 紅葉深

夕落葉 / 浦雪 忍恋 不逢恋 / 逢切恋 顯恋 恨恋 / 嶺松 窓竹 羈

中嵐 / 旅泊浪 神祇

(3才) 初春 中春 後春 / 初夏 中夏 後夏 / 初秋 中秋 後秋 /

初冬 中冬 後冬 / 春待恋 夏逢恋 秋別恋 / 冬恨恋 春述懷 夏懷

旧 / 秋神祇 冬尺教

(3ウ) 三十首

早春鶯 朝霞 夕梅 / 庭春雨 見花 聞時鳥 / 五月雨久 水辺螢 遠

夕立 / 樹陰納涼 草花露 霧中鴈 / 野鹿 深夜月 山紅葉 / 初冬時雨

川水 連日雪

(4才) 浦千鳥 夜神樂 忍恋 / 不逢恋 待恋 逢不会恋 / 恨恋 峯

松 窓竹 / 羈中衣 山家水 社頭祝 / 霞 鶯 若菜 / 梅 柳 桜 / 春

雨 帰鷹 苗代

(4ウ) 款冬 卯花 五月雨 / 泉 萩 鹿 / 月 擣衣 虫 / 紅葉 時

雨 雪 / 歳暮 初恋 忍恋 / 初逢恋 後朝恋 旅恋 / 松 海路 祝言

(5才) 五十首

春雪 氷解 梅香 / 柳風 春曙 栽花 / 折花 桃花 田蛙 / 松藤 郭

公 早苗 / 夏月 里樗 浦螢 / 梢蟬 夏祓 残暑

(5ウ) 七夕 槿花 鈴虫 / 野鹿 袖月 渴月 / 河霧 浜菊 墻鳶 /

時雨 竹叢 千鳥 / 網代 岡雪 原雪 / 炬火 暁恋 朝恋 / 昼恋 夕

恋 夜恋

(6才) 見恋 切恋 友恋 / 久恋 絶恋 関杵 / 磯浪 漁舟 故郷 /

旅夢 祝言 / 早春霞 余寒風 若木梅 / 遠帰鷹 夕春雨 花初開 / 花

満山 花如雪 躑躅紅

(6ウ) 暮春月 朝更衣 待郭公 / 早苗多 磯夏月 夕立過 / 螢知夜

晚夏蟬 初秋露 / 七夕別 草花早 深山鹿 / 野夜虫 嶺月明 海辺月

橋上月 遠擣衣 河紅葉 / 杜時雨 池寒芦 寒夜月

(7才) 浜千鳥 野外雪 松雪積 / 夕炭竈 寄風恋 寄雨恋 / 寄山恋

寄海恋 寄草恋 / 寄木恋 寄鳥恋 寄虫恋 / 暁更鷄 古寺鐘 遠村煙

田家水 名所浦 羈中雲 / 独述懷 寄鶴祝

(7ウ) 若菜 梅花盛 門柳 / 春月 夜帰鷹 名所花 / 落花 雲雀

夕蛙 / 池杜若 新樹 郭公 / 砌橋 五月雨 早苗 / 蚊遣火 納涼 庭

萩 / 野露 籬種 尋虫声

(8才) 鷹初來 夕出月 惜月 / 暁擣衣 秋夜長 黄葉 / 時雨 寒草

千鳥 / 水鳥馴 雪中望 鷹狩 / 歳暮忙 寄日恋 寄煙恋 / 寄山恋 寄

関恋 寄草恋 / 寄木恋 寄鷄恋 寄猪恋

(8ウ) 寄席恋 寄紐恋 浦鶴 / 松経年 山家 旅行友 / 懷旧 神祇

百首

立春 山霞 海霞 / 子日 若菜 朝鶯 / 津梅 夜梅 岸柳

(9才) 春雨 春月 春曙 / 帰鷹 栽花 翫花 / 惜花 春駒 款冬 /

紫藤 暮春 首夏 / 更衣 卯花 郭公 / 砌橋 早苗 沼浦 / 梅雨 夕

立 夏草

(9ウ) 夏月 瞿麦 氷室 / 納涼 夏祓 早秋 / 七夕 稻妻 籬萩 /

隣槿 葛風 野萩 / 路薄 暁露 夕鹿 / 初鷹 叢虫 崎霧 / 嶺月 湖

月 関月

(10才) 浜菊 擣衣 黄葉／暮秋 初冬 時雨／落葉 枯野 寒芦／井水 千鳥 残鴈／網代 寒月 庭雪／炭竈 埋火 仏名／歳暮 初恋 忍恋

(10ウ) 聞恋 見恋 尋恋／祈恋 契恋 待恋／逢恋 別恋 顕恋／稀恋 絶恋 怨恋／旧恋 山家 田里／閑居 離別 羈旅／海路 野宿 故郷

(11才) 眺望 述懷 懷旧／哀傷 蕭寺 端籬／祝言／関路早春 湖上朝霞／霞隔遠樹 羈中間鶯／隣家竹鶯 田辺若菜／野外残雪 山路梅花

(11ウ) 梅薰夜風 水辺古柳／雨中待花 野花留人／遠望山花 曉庭落花／故郷夕花 河上春月／深夜帰鴈 藤花随風／橋上款冬<sup>(マ)</sup> 舟中暮春／卯花隠路 初聞郭公

(12才) 山家郭公 池朝菖蒲／閑居蚊火 盧橘驚夢／杜五月雨 野夕夏草／潤底螢火 行路夕立／初秋朝風 閏月七夕／野亭夕萩 江辺曉萩／山家初鴈 海上待月

(12ウ) 松間夜月 深山見月／草露映月 関路惜月／鹿声夜友 田家擣衣／古渡秋霧 秋風滿野／籬下聞虫 紅葉写水／山中紅葉 露底槿花／河辺菊花 独惜暮秋

(13才) 初冬時雨 霜埋落葉／屋上聞霰 古寺初雪／庭雪厭人 海辺松雪／水郷寒芦 湖上千鳥／寒夜水鳥 歳暮潤水／初尋縁恋 聞聲忍恋／忍親昵恋 祈不会恋

(13ウ) 旅宿逢恋 兼厭晚恋／帰無書恋 遇不逢恋／契経年恋 疑真偽恋／返事増恋 被厭賤恋／途中契恋 従門帰恋／忘住所恋 依恋祈

身／隔遠路恋 借人名恋

(14才) 絶不知恋 互恨絶恋／曉更祢覚 薄暮松風／雨中緑竹 浪洗石苔／高山待月 山中滝水／河水流清 春秋野遊／関路行客 山家夕嵐／山家人稀 海路眺望

(14ウ) 月羈中友 旅宿夜雨／海辺曉雲 寄夢無常／寄草述懷 寄木述懷／逐日懷旧 社頭祝言／初春 峯霞 海辺霞／鶯 野若菜 里梅／柳 春曉月 春雨

(15才) 帰雁 早蕨 栽花／尋花 朝花 夕花／花浮水 苗代 河款冬／藤 暮春 更衣／葵 待郭公 郭公遍／菖蒲 橘 五月雨／夏草夏月 蚊遣火

(15ウ) 螢 池蓮 夕立／納涼 六月祓 初秋／七夕 萩 萩／女郎花 叢虫 遠初鴈／田鹿 秋夕 山月／橋月 浦月 社頭月／水郷月 曉鳴 擣衣

(16才) 河霧 菊 紅葉深／九月尽 初冬 時雨雲／霜 篠霰 寒芦／冬月 水 千鳥／水鳥 網代 浦雪／積雪 神楽 炭竈煙／歳暮 寄月恋 寄雲恋

(16ウ) 寄露恋 寄雨恋 寄風恋／寄山恋 寄閑恋 寄海恋／寄原恋 寄橋恋 寄木恋／寄草恋 寄鳥恋 寄虫恋／寄獸恋 寄玉恋 寄鏡恋／寄枕恋 寄衣恋 寄糸恋／曉鷄 名所野 名所瀧

(17才) 名所海 山家 田家／述懷 山旅 海旅／寄松祝／(二行アキ)／春風春水一時来／雪消水又积

(17ウ) 陽春布德／南枝暖待鶯／鶯入新年語／波払黄柳梢／後会契花時／花時鞍馬多／季陽已閑

(18才) 稚竹可人／松風調琴／水石歴幾年／水樹多佳趣／筆写人心／

隱士出山／遠山如画図

(18ウ) 奥遊未央／治国如栽樹／避年属君／幸逢太平代

(19才) 天和三年弥生中旬／羽林中郎將藤原雅豊

【翻刻】②『組題』

冷泉家

(1才) 五十首

早春 霞 鶯／梅 春雨 春月／柳 花 落花／暮春 郭公 五月雨

／夏草 蛩 納涼／初秋 露 霧

(1ウ) 草花 鴈 鹿／月 擣衣 紅葉／九月尽 時雨 寒草／水

水鳥 雪／忍恋 待々 逢々／久々 變々 別々／遇不逢々 恨々

思々

(2才) 絶々 暁 夕／松 竹 眺望／山家 旅 寺／懷旧 神祇／

(一行アキ) 早秋 七夕 露／霧 萩 萩

(2ウ) 虫 鹿 初鴈／秋夕 秋田 待月／翫月 惜月 鶉／鳴 擣

衣 菊／紅葉 暮秋 初恋／忍々 祈々 憑々／待々 逢々 前々

(3才) 頭々 稀々 變々／厭々 忘々 絶々／恨々 旧々 暁々／

雲 雨 河／橋 松 竹／鶴 山家 田家／羈旅 眺望 往事

(3ウ) 尺教 祝／

三十首

初春雪 春浜霞 野宿梅／浦鶯 朝若草 戸外春風／春湊月 山家柳

溪帰鴈／春曉花 春夕花 水辺藤／暮春 不逢恋 切々

(4才) 遠々 逢夢々 後朝々／久々 白地々 恨々／祈々 契々

関路雲／古渡舟 薄暮煙 山家燈／古寺松 河辺鳥 暁神祇／(一行

アキ) 霞満山 雪中鶯声 庭若草

(4ウ) 梅薫風 深夜春月 帰鴈少／花春友 尋桃花 田春雨／野雲

雀 夕躑躅 藤花遠家／三月尽 忍久恋 祈経年々／見不逢々 互契

々 深更待々／適逢々 欲別々 依涙頭々／被友々 恨心中々 関路

鶉

(5才) 晚鐘遠聞 草庵松 窓前竹／名所浦鶴 山家夜夢 寄神祝／

(一行アキ)

二十首

海辺霞 窓梅 河辺柳／春雨 春月 歸／折花 故郷々 落々

(5ウ) 春田 寄衣恋 寄枕々／寄鐘々 寄糸々 寄弓々／渡舟 薄

暮煙 山家／古寺松 海懷旧／(一行アキ) 暁鶯 梅風 春雨／浦

花 苗代 郭公

(6才) 夏草 納涼 夕萩／遠々 見月 擣衣／紅葉 松霜 千鳥／

深雪 待恋 頭々／窓燈 旅行

十五首

秋夕 野分 沢鳴

(6ウ) 海辺月 水辺菊 紅葉浅／暮秋雨 見手迹恋 聞音々／絶見

々 遂日増々 来不留々／夜鶴 故郷夢 磯浪／(一行アキ) 新秋

雨 閑庭露 暁萩／初萩 薄隨風 尋虫

(7才) 深山鹿 山辺月 擣衣／関紅葉 遠村煙 籬竹／旅館 眺望

寄世祝

十首

谷鶯 春月幽 瞿麦露／初秋 聞擣衣 葦間水／憑恋 逢々 塩屋煙

(7ウ) 往事／(一行アキ) 霞遠山衣 每春見花 五月郭公／月照

草露 鹿声驚夢 雪埋行路／送書待恋 互恨絶（恋） 長河似帶／社頭松風／（一行アキ）

（8才）初秋風 朝萩 山初鴈／湖月 夕擣衣 寄雲恋／寄浦（恋） 寄枕（恋） 名所松／社頭祝／（二行アキ）

一首

春禁苑春來早

（8ウ）春色柳先知／早鶯歌帝德／霞隔漁樵路／野沢始迎春（已上同） 春到管絃中／夏月光落夏衣／日暮蟬聲多

（9才）郭公只一聲／草滋行客路（已上同） 風月先秋涼（秋） 秋風思故郷／野色皆秋花／漢晴月明／星河欲曙天

（9ウ）秋望在山水／月下只思友／終日翫菊（已上同） 菊花久芳（冬） 寒流帶月澄／寒山唯白雪／梅花不待春

（10才）歳与深雪（雜） 朝日円如鏡／遠山似画図／雨裏旅人情／松風入琴／晴後遠水／河水久澄

（10ウ）松為久友（已上同） 禁庭松久／（二行アキ）

二首

春山月 人伝恋／初春鶯 寄松祝

（11才）故郷花 不逢恋／湖辺夕花 夕述懐／帰鴈 逢恋／松藤 旅行／暮春落花 互忍久恋／（一行アキ）（夏） 更衣 田家

（11ウ）郭公 恨恋／橘 燈／夕顔 偽恋／納涼忘夏 江雨鶯飛／（一行アキ）（秋） 草花早 通書恋／尋虫聲 山中滝

（12才）月出山 寄枕恋／野月 閑居／籬下聞虫 会不逢恋／深山見月 調和不逢恋／古渡秋霧 雨中緑竹／滝紅葉 閑中燈（秋） 嵯峨野

雜 不尽山

（12ウ）秋 明石浦 雜 会坂関（已上同） 菊花色々 海路日暮／（一行アキ）

庭草帶霜 忍尋縁恋／時雨 遠恋／河冬月 見増恋／霜埋落葉 旅宿逢恋

（13才）冬 片野 恋 袖浦（已上同） 朝雪 古寺／（二行アキ）

二首

春 遠嶋朝霞 隣家夜梅 互忍久恋／関路鶯 山花半開 暮漁舟

（13ウ）柳 帰雁 恨／故郷花 春山月 尺教／春日遅 摘董 寄水恋／藤為松花 残春少 関鶏／江上春望 樵路躑躅 恋依月増／春風

春露 春祝／春山 春池 春恋 春露 春祝／春山 春池 春恋

（14才）（二行アキ）（夏） 更衣 余花 旅行／溪卯花 待郭公 寄風恋 五月雨 盧橘風 山眺望／人伝郭公 夜聞（郭公） 寄月不逢恋／納涼

夏祓 往事

（14ウ）秋 夕露 枕上虫 寄月恋／草花色々 暮山鹿 遊女／女郎花 曙初鴈 名所松／秋夕風 田稻妻 羈中情／閑待月 曉山月 契空恋

月前野 月前浦 月前恋／遠山霧 近擣衣 初逢恋 祝言／（二行アキ）（冬） 時雨 寒草 遠恋／江水 冬月 片思

（15ウ）雪中望 河千鳥 夕松風／神楽 早梅 恨恋／冬夕 冬夜 冬祝／（一行アキ）

五首

山霞 夕梅 春曙／忍逢恋 被忘（恋）

（16才）春夜 夏曉 秋朝／冬夕 久恋／春山朝 夕早苗 行路萩／ 曉郭公 松歴年／里時雨 庭落葉 冬山月／寄草恋 寄松祝／野雪

山家水 関歳暮

(16ウ) 忍恋 躑⑤々／(二行アキ)

七首

湖上霞 雪中鶯 夜梅／雲間帰鴈 春月 庭花／落花似雪

(17才) 夕鸞 河春月 交花／戸外藤 待空恋 増⑤々／忘久⑤々／遠山

霞 柳随風 夜帰鴈／野遊糸 水辺蛙 路款冬／春不留／霞中滝 夏

草 憐月

(17ウ) 望雪 忍恨恋 閑居燈／竹久緑／待花 独見花 月映花／径

花 水上花 故郷花／惜花／夏雲 々露 々山／々河 々鳥 々獸

(18才) 々衣／(二行アキ)／夏きにけりと 山ほと、さす 菖蒲の

草も／もゆる螢を 夏の草の 岩井の水を／秋まつほと

(18ウ) 春 音羽川 夏 猪名野 秋 伊駒山／冬 住吉浦 恋 伏見里 雑 長柄橋／

雑 会坂関／萩風 初鴈 野月／関霧 菊花 紅葉／暮秋／七夕 露

薄

(19才) 鹿 月 擣衣／惜秋／湖辺早秋 田上稻妻 山女郎花／月前

遠鐘 月前幽情 夕霧埋枕／名所紅葉／初夕嵐 見冬月 河千鳥／遠

嶺雪 庭雪深 炭竈煙

(19ウ) 市歳暮／落葉 残菊 池氷／冬月 庭雪 神楽／歳暮／時雨

千鳥 氷／衾 網代 窓竹／祝言

(20才) 冬日 冬月 々雨／冬夕 冬夜 冬社／冬庭／冬山朝 冬夕

嵐 冬古寺／冬水郷 冬旅行 冬述懐／冬祝言

(20ウ) 天和三年九月中旬／羽林中郎將藤原為綱

### 【解説】

組題とは、百首または三十首・五十首・千首などの定数歌で用いられる歌題を集合させたもので、長治二年(一一〇五)の『堀河百首』がその嚆矢とされる<sup>①</sup>。近世以降の写本には、先に述べたように「組題」と称される資料が幾つか存在するが、それぞれに内容に相違があり、本稿で紹介する『組題飛鳥井家』、『組題冷泉家』と同じ本は見あたらない。宮内庁書陵部蔵『冷泉家組題』(函番 伏一六二)があるが、『組題冷泉家』とは別の内容が記されている。また、青山会文庫には『十首題』(函番三八四)がある。この本の奥書は「此一冊 以飛鳥井榮雅直筆 令書写畢 天和三亥十一月日」とあり注目されるが、『組題飛鳥井家』とは一致しない。それでは、『組題飛鳥井家』、『組題冷泉家』の歌題はどのような内容なのか、その一部を検討したい。

『組題飛鳥井家』、『組題冷泉家』ともに、それぞれの構成を確認する。まず、『組題飛鳥井家』は「十首、十五首、二十首、三十首、五十首、百首」からなり、『組題冷泉家』は「五十首、三十首、二十首、十五首、十首、一首、二首、三首、五首、七首」からなる。「組題」を集めた本のうち、「一首、二首、三首、五首、七首」を分類するものは少ないが、同じく伊達文庫蔵の『組題』(伊 911.201.58)の十巻中の第三巻には「一首、二首、三首、六首、七首、八首」の歌題が挙げられている。ただし、『組題冷泉家』と『組題』の内容は一致してはいない。

それでは、『組題飛鳥井家』、『組題冷泉家』は何をもとに作成されたのか、一部の典拠が判明するため、以下に記したい。『組題飛鳥井家』は後半に「百首」の歌題を掲出する。百首の規範となったのは『堀河百首』<sup>②</sup>であることが度々指摘されている<sup>③</sup>。そこで、『組題飛鳥井家』と『堀河百首』の

歌題を比較すると、次のようである。

『堀河百首』

春二十首

立春 子日 霞 鶯 若菜 残雪 梅 柳 早蕨 桜 春雨 春駒

帰雁 呼子鳥 苗代 菫菜 杜若 藤 款冬 三月尽

『組題』

立春 山霞 海霞 子日 若菜 朝鶯 津梅 夜梅 岸柳 春雨 春

月 春曙 帰雁 栽花 翫花 惜花 春駒 款冬 紫藤 暮春

『組題』は『堀河百首』と同様、春は二十題が挙げられており、

「立春」から「霞」「鶯」と続く流れは踏襲されている。ただし、傍線

部で示したように全く同じ歌題は七つに留まる。

中世に成立した『宝治百首』は、「山霞」「朝鶯」「翫花」「惜花」「暮春」が春の二十首題として挙げられており、この『組題』とも最も類似する内容となっている。他にも、恋の歌題では、そのほとんどが『宝治百首』と一致している（傍線部が同じ歌題）。

『組題』

寄月恋 寄雲恋 寄露恋 寄雨恋 寄風恋 寄山恋 寄閨恋 寄海恋

寄原恋 寄橋恋 寄木恋 寄草恋 寄鳥恋 寄虫恋 寄獸恋 寄玉恋

寄鏡恋 寄枕恋 寄衣恋 寄糸恋

『寄露恋』『寄山恋』『寄糸恋』の四つの題が『宝治百首』と一致しないものの、ほぼ同じ歌題が採りあげられている。しかし、百首題すべてが『宝治百首』と類似しているわけではない。夏の歌題は『組題』が十五首、『宝治百首』は十首であり、十五首のうち「首夏」「夕立」「早苗」「夏草」「夏月」の五つしか一致していない。

再び春二十首の歌題に戻り、『組題』にある「津梅」に注目したい。「津梅」の歌題は用例の少ないもので、『草根集』(六二一)に見える。また、後土御門院の『紅塵灰集』に、文明八年九月に行われた百首が載る。

立春 日次百首 大納言入道栄雅点 文明八自九九

三〇一 春來ぬと今朝よりなべていふ人の心ややがてのどけかるらん

山霞

三〇二 出る日の光をこめて山の端の紅ふかき朝霞かな

海霞

(中略)

祝言

四〇〇 いにしへに天地人もかはらねば乱れははてしあし原の国  
これは、栄雅、飛鳥井雅親が後土御門の百首詠に合点したものである（合点）。三〇一〜四〇〇番までの百首のうち、「立春」「山霞」「海霞」から、百番の「祝言」(二〇)に至るまで、一部順序が違っている箇所があるものの（籬萩 野萩 路薄 暁露 隣権 葛風 夕鹿で  
あるところを、『組題』では籬萩 隣権 葛風 野萩 路薄 暁

露 夕鹿とする。翻刻一三〜一四ページ参照）、『組題』の掲載する百首題と同じ歌題である。『組題』の編者と思しい飛鳥井雅豊は、この後土御門の百首詠をここに採り入れたのだと推測される。

『組題』では、後土御門の百首詠と一致した最後の歌題「祝言」に続けて「関路早春 湖上朝霞：社頭祝言」(11オ〜14ウ)と再び春から始まる百首題を記す。この歌題は、「藤川百首」の題である。藤原定家が四文字の難題で詠んだ百首で、後世の歌人達は詠歌の修練の

ために用いた。

もう一つの『組題<sup>冷泉家</sup>』は「五首」の歌題として、「春山朝 夕早 苗 行路萩 暁郭公 松経年」を掲出する。これと類似したものに、建保三年（一二二五）六月二日、後鳥羽院御所にて興行された『院 四十五番歌合』がある。歌題は「春山朝 夕早苗 行路秋 暁時雨 松経年」である。ただし、五首という限定された題でありながら全ては一致していない。

他には、後奈良院の着和歌に次のようなものがある（『後奈良院 御製御月次御法楽公宴続歌拔書』）。

（三月）七日 春浜霞

六五五 浪の上の霞やよそになびくらん浦風遠く吹上の浜

八日 野宿梅

六五六 立よりて宿りやはん梅の花野に吹風もあかぬ匂ひに

九日 浦鷺

六五七 浪風の浦のとまやに音づれて今を春とやうぐひすの鳴

（中略）

廿一日 水辺藤

六六九 池水に影をうつして咲藤やさながら波の花と見ゆらん

廿二日 暮春

六七〇 花鳥の色音よいづれ物ごとに春の名残の惜しくやはあらぬ

この着和の歌題と、『組題<sup>飛鳥井家</sup>』の三十首が近い。「春浜霞（三月七日） 野宿梅（八日） 浦鷺（九日） 朝若草（朝若菜）として十日 戸外春風（十一日） 春湊月（十三日） 山家柳（十四日） 溪帰鷹（十五日） 春暁花（十七日） 春夕花（十八日） 水辺藤（二十一日） 暮春（二十二日）」とある。この後

奈良院の着和歌は年次未詳で、いつ詠まれたものかわからない。また、永享四年三月（一四三二）とある冷泉持為の詠草に、

三月二日 仙洞着和（中略） 春浜霞

二二 霞しく浜松がねもわが道もあらはるる世は波ぞのどけき

（中略） 同七日、於仙洞御短冊 戸外春嵐

二四 をのづから春の嵐のたまだれを楨の戸口にながめをやせん

とあり、「春浜霞」「戸外春嵐」と類似した歌題が見える。後奈良院は

明応五年（一四九六）生であり、この持為の着和歌の方が早い例となるが、持為の参加した仙洞着和の全貌がわからず、『組題<sup>冷泉家</sup>』の歌題とどの程度一致するのは不明である。

『組題<sup>冷泉家</sup>』は飛鳥井家のものと比較して、歌例の少ない歌題が多く掲載されている。一首題には、句題と思しい題が挙げられているが、その題で詠まれた歌例は見当たらないものが多い。冷泉為綱の手による本であるならば、為綱の手にあった資料は何なのか、もう少し精査する必要がある。紙面の都合で簡単な解説に留まったが、『組題<sup>飛鳥井家</sup>』『組題<sup>冷泉家</sup>』ともに、それぞれの個性が確認できた。今後、もう少し踏み込んだ調査をし報告したい。

- （一） 組題についての主要な論に、松野陽一「組題構成意識の確立と継承―白河院期から崇徳院期へ―」（『文学語学』第七〇号、一九七四年一月）、深津睦夫「中世勅撰和歌集史の構想」（二〇〇五年、笠間書院、蔵中さやか「国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』（一）について（上）／（下）」（神戸女学院大学論集」第五七巻第二号、二〇一〇年六月／第五七巻第二号、二〇一〇年二月）などがある。
- （二） 以下、引用は『新編国歌大観』または『私家集大成』による。引用に際し、一部、濁点を付し、踊り字をひらがなに、ひらがなを漢字に改め

た箇所がある。

- (3) 橋本不美男・滝沢貞夫『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』（一九七六年、笠間書院）、蒲原義明「堀河百首題の享受と変質―特に十三代集期の応制百首を中心に―」（橋本不美男『王朝文学 資料と論考』、一九九二年、笠間書院）他。

〈付記〉

本稿は平成二七年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 課題番号：15K02257）の研究成果の一部をまとめたものである。また、『組題』飛鳥井家、『組題』帝塚家の調査では宮城県図書館の御協力を得、翻刻の許可を頂いた。心より感謝申し上げます。

（まつもと あさこ／日本中世文学）